

JFSTA NEWS

contents

新年ご挨拶	1	事務局便り	8
会員通信	2		
会務報告	5		

新年ご挨拶

会長 川口 恭一

2018年を迎え、新年のお慶びを申し上げます。

昨年12月23日、鹿児島県種子島宇宙センターにおいて分解能250mという高精度の人工衛星が打ち上げられました。この人工衛星は従来のものに比べ分解能が高い（従来のものは分解能1km程度）ため、灘や湾のような沿岸域の詳細な水温情報や赤潮等の海色情報を得ることができます。これらデータの水産分野における利用についてプレス関係者に説明する役割を担うとともに、打ち上げを視察するため種子島まで赴いたところです。

全長53m、直径4m、総重量220トンのH-II Aロケットにより、2トンの人工衛星（GCOM-C:しきさい）が800kmの地球周回軌道に打ち上げられました。多数の関係者が長年かけて12月23日午前10時26分22秒の打ち上げに向け集中してきた成果が明らかになる瞬間です。ゲストハウス屋上から見えた光景は、カウントダウンが終わると同時にロケット下部から勢いよく白煙が湧きあがったものの全く静かであり、ロケットが上昇を始めたころになって始めてバリバリバリッという轟音が響き渡りました。1分後にはブースターロケットの燃焼終了・切り離しを経て、15分後に800kmの軌道に人工衛星を乗せることに成功しました。現在、順調に飛行しており、およそ1年程度の準備の後、本格的なデータ提供運用に入っていく予定です。

このようなロケットや人工衛星の製作、その打ち上げは、膨大なデータにより膨大な計算に基づいて緻密に設計されており、いささかの曖昧さも許されないものであり、科学と技術の粋を集結させたものといえましょう。



しきさい発射

近年、海洋環境の変化についても大量の物理化学的データを集積し、大型コンピュータによる海洋環境の再現・予測が行われ、一般に公開されるようになってきています。

そして、この海洋環境と生物の行動との関係を解明しようとする研究開発に取り組む動きが加速しています。精度の高い膨大な海洋データと大量の生物関連データが、AI(人工知能)を駆使して一体的に解析され、最適の答えが導かれます。精度の高い生物の対応行動予測も可能となる日も遠くないかもしれません。宇宙関係の科学技術と異なり、海洋環境と生物の行動との関係についての際限ない曖昧さ(未知領域)が、これを容易にしないかもしれませんが、要は、結果の確実性について漁業者等の満足がどの程度得られるかにかかっているといえましょう。

平成30年は、平成20年10月の協会創立以来、満10周年にあたります。全水技協のさらなる発展の年となるよう事業運営に取り組んでまいります。

会員各位の積極的な参加をお願いし、新年のご挨拶といたします。

会員通信

魚見桜の蘊蓄⑳ 秋色模様の紅葉鯛

上城義信

平成29(2017)年10月28日(土曜)、霜降の朝、日出町深江漁港の魚市場には、前夜来の魚がブルーシートに覆われて並んでいる。午前6時30分には近郊の漁港からも活魚運搬車で魚が運び込まれ、セリ場の小間を埋めていく。



獲ってきたマダイを出荷する漁夫

7時前にはブルーシートが剥がされ、小間の全容が明らかになる。先月までセリ場を席卷したマダコとガザミが姿を消し、替わってマダイとブリが台頭し、人々の目を惹く。ともに50cmを超える大物魚だ。深紅に色づいた鱗に包まれたマダイはいずれも風格十分、尚且つ神々しい。

春は桜色、夏は金箔、そして秋は紅葉した紅葉色。四季に合わせて体色が変化するマダイは、

まさに魚の王様にふさわしく魅力的だ。



紅葉色が美しいマダイ

この日、競りに並んだ魚介類の種類別構成とその函数をみると、魚類が31種(284函)、甲殻類4種(27函)、軟体類5種(43函)となり、種類数は先月に比べて、魚類が4種、甲殻類が1種、合計5種が減って、計40種が揚がった。一方、出荷函数は、魚類が大幅に増加したために先月に比べて86函増加した。

次いで、セリ場に揚がった魚介類の魚種別の順位をみると、ベストテン入りは、魚類が8種で圧倒的に多く、軟体類1種、甲殻類1種となった。

首位に立ったマダイは、越冬準備のために大挙して岸寄りにやってきたもの。

第2位のコウイカは、今春生まれの新仔群が主体を占め、成長が著しい。第3位のイボダイは近年、徐々に減少傾向が見られ、今後の動向が気がかりだ。第4位のチダイは健闘著しい。第5位のエソは周年漁獲されるが、今一つ人気に欠けるため価格も安い。ただ幸いなことに練り物の原材料としての需要は大きい。第6位のサワラは、低水準ながら周年にわたり漁獲が続く。第7位のヤマトカマスは、9月から漁獲が伸びて、好調を維持している。第8位及び第9位にカンパチとブリが入った。人気の高い魚種だけに、今後の漁獲量の動向が気になる。第10位にはヒゲナガクダヒゲエビが入った。本来は深海性底生種



ヒゲナガクダヒゲエビ

ながら、近年では秋～冬に底曳網漁船で漁獲されるようになり、朝市を盛り上げている。肉質には甘みがあるものの、殻がやや硬く、料理法には工夫が要る。

ベストテン以外ではメジナ、ギンガメアジ、ヒゲソリダイ、イトヨリダイ、カゴカキダイ、ヒラスズキ、タマガンゾウビラメなど貴重な魚種が少量ながら揚がってくる。

セリ場の隣には魚捌き所があり、買った魚をその場で捌いてくれる。また週末の土曜日には漁協直営の「食事処」が営業を始めた。ハモカツ井や琉球井が人気。他にも地魚を食材にした南蛮漬けも美味しい。近くには地だこのたこ焼き屋台や花の苗や野菜の露店も人気。

お魚好きの方々には、趣味と健康のため朝市通いをお勧めします。

もみじ鯛

越冬前に

ごあいさつ

魚見桜の蘊蓄② 冬の味覚コウイカ爆漁の予感

今年、平成29(2017)年のマアジ漁は上半期(1～6月)はエソに次いで第2位と好発進したものの、7月以降10月まではベストテン外れの不振が続いたが、ようやく回復の兆しが見えてきた。一方、冬の味覚コウイカも4月以降低迷が続いたが、10月からは回復の兆しが見えてきた。11月になって餌のカタクチイワシの大群が別府湾に押し寄せている。

冬季のイカ漁、なかでもコウイカ(まいか)漁には大きな期待が寄せられている。

平成29(2017)年、旧暦72候の小雪。古くから新嘗祭の伝統行事で知られる。朝6時半、夜明け前の漁港では朝漁から戻った漁船から魚を水揚げする漁夫たちの笑顔が弾む。

生簀には産卵準備で岸によって来たマコガレ

イが覗く。セリ場と道を挟んで反対側の活魚棟ではハモの計量が終わったところ。400kgを超えるハモを一尾ずつ計量し、サイズ別に分けて専門店に渡す作業は熟練がいる。

一方、セリ場では全部で15小間のうち12小間に魚函が埋まり、久々の活況を呈した。

仲買同士の下見もお互いに熱気がこもる。一般買い物客の出足も極めて好調。最近は女性客の姿も多くなった。

当日の水揚げ魚の種類別構成と函数をみると、魚類が33種(265函)、甲殻類6種(67函)、軟体類46種(387函)となり、エボダイ漁が8月下旬から10月中旬まで続いたが、11月下旬になってほぼ終了した。出荷函数は魚類が先月より19函減ったものの甲殻類が40函、軟体類

が12函増えて、合計函数はプラス33函の増加となった。

甲殻類のなかではクマエビ（通称足赤）が大量に水揚げされ、クルマエビの代わりとして仲買や一般客の人気を集めている。

次いで水揚げ魚のランキングをみると、首位にはマアジが久々に返り咲いた。第2位にはブリの若魚ヤズが入った。第3位のクマエビは初の快挙となった。第4位のスズキは若魚セイゴが主体。第5位は先月の紅葉鯛がやや順位を下げ、見頃が過ぎたようだ。第6位は先月新仔群のコウイカが成長したもので、これからが楽しみである。第7位はサルエビ、9月～10月とやや不振だったが、回復の兆しを見せた。第8位のコノシロは5ヶ月振りの顔見せとなった。第9位のマダコは夏場の盛漁期以降も水揚げが続く。天敵ウツボがないのが幸いしているようだ。第10位のカワハギは周年顔見せしてくれる。

珍客のミミイカは久しぶりの顔見せ。そして、この日のトピックスはタイマイと見られる海亀の漂着。甲長60cm、体重24kgの大物亀。まず近くのお寺で供養した後、海亀等の希少生物の保護に取り組むNPO法人「おおいた環境保全フォーラム」(大分市)へ引き渡した。

朝市を支える人々の表情や動きも興味を惹く。朝漁を終え、生簀から魚を取り上げる顔。それを足取り軽くセリ場に運ぶ漁夫の奥さん。



セリ場に魚を運ぶ漁夫



漁夫の奥様も活躍

お目当ての魚を仲買に頼む人、自力で旬の旨い魚を探すご婦人連れ、競りを仕切る漁協の若手職員等々。



お目当てを仲買に頼む人

地元の魚を愛する人々が集う朝市。早朝の僅か2時間ほどの喧噪が過ぎると、静寂の時間と空間が残る。人気の去ったセリ場の主は、青鷺君たちと交代する。

秋 深し

お産準備の かれい 鱒 来る

(写真撮影:松澤京子)



水産庁記者クラブでの発表

討し、この度、沿岸域の豊かな漁業生産を維持するための提言として報告書および同報告書の要約版を取り纏め、昨年12月13日水産庁記者クラブにおいて発表しました。

平成26年から3 ヶ年にわたりご議論・ご指導いただいた松田治委員長、鈴木輝明委員、反田

實委員、中田喜三郎委員、山口徹夫委員、山田久委員に深く感謝いたします。

なお、本報告書・要約版は今後の水産行政、環境行政あるいは港湾や海岸および河川管理行政等の国・都道府県等の諸施策に活用されるように、水産庁、環境省をはじめとして関係省庁・機関へ説明し、都道府県・試験研究機関、漁業協同組合連合会、関係大学へ配付しました。

当協会としては提言の主旨を活かして漁業関係者が希望するような「豊かな海」が一日も早く実現するよう引き続き努力する所存ですので、会員の皆様にはご指導・ご協力いただきたくお願い申し上げます。

(文責:三戸)

平成29年度全国水産試験場長会会長賞受賞者へ副賞を贈呈

平成29年11月7日(火)に静岡市(静岡県庁別館)で開催された水産試験場長会総会に当協会の川口会長が出席し、平成29年度全国水産試験場長会会長賞に選定された業績に対し、直接受賞者に副賞(図書券)を贈呈しました。

(受賞課題及び受賞者)

1.「北海道のマナマコ資源の資源管理、生態に関する研究」

(地独)北海道立総合研究機構

稚内水産試験場 調査研究部

代表者 主査 佐野 稔

選考理由:

道内各地のマナマコの生態情報を整理するとともに、ICT技術を活用して簡便で効率的な資源管理のシステムを構築し、マナマコ資源の持続的な利用方法を構築した。これによって漁業者は獲りすぎる前に漁業を切り上げることが可能となり、その結果、減少傾向にあったマナマコの漁獲量が3割増加するというV字回復を遂げた。これらの成果はマナマコの持続的利用に大きく貢献するものであり高く評価できる。

2.「シラエビの資源変動要因に関する研究」

富山県農林水産総合技術センター水産研究所

主任研究員 南條 暢聡

選考理由:

シラエビは水産重要生物の一つであるが、資源変動や資源生態的な情報はほとんど知られていなかった。そこで本研究では初期減耗のメカニズムや水温と成長との関係など資源変動要因を明らかにした。本研究の成果は、漁業者の資源管理指針などにも活用され、魅力のある安定した漁業の実現に大きく寄与しており高く評価できる。

3.「閉鎖性湖沼における放射性セシウムの動態解明」

群馬県水産試験場 放射能研究グループ

代表者 主席研究員 久下 敏宏

選考理由:

地域の水産業が無くなる恐れのあるなかで、地域の水産業を絶やさないために、閉鎖性水圏における放射性セシウムの動態を明らかにし、関係者に将来展望を提示できたことは、大きな成果であり、高く評価できる。かつて無い大規模な放射能汚染という中で、調査手法や結果の解析方法なども、貴重な業績といえる。

(文責:井上)

佐藤魚水氏からの魚拓の寄託について

美しい魚拓の制作者として知られる佐藤魚水氏から、氏の作品を当協会に寄託していただきました。図はその一部で、平成30年の当協会の年賀状に使用したヤマメの魚拓です。

今後、これらの作品の保管・管理に向けて体制を整備し、当協会の業務等に活用するとともに、将来的には外部からの要望にも対応していく予定です。



彩色魚拓(ヤマメ)

(文責:井上)

川口会長の叙勲(瑞宝中綬章)を祝う会

平成29年度秋の叙勲で、当協会の川口恭一会長が瑞宝中綬章を受章され、その祝賀会を平成29年12月4日(月)に、三会堂ビル2階のS会議室に於いて開催しました。

当日は、正会員・賛助会員の他、水産庁関係者等、41名が参加し、盛況の内に綬章をお祝いしました。



参加者一同



花束の贈呈

(文責:井上)

水産研究・教育機構からの情報

■刊行物

おさかな瓦版 No.80 (2017年11月発行)



「おさかな瓦版」は水産研究・教育機構が年6回発行するニュースレターです。小中学生以上を対象に、水産生物や漁業を分かりやすく解説しています。

No.80は、エビ・カニシリーズの第4回目、「シャコ」です。甲殻類の仲間、エビに似た形をしているシャコについて、巣穴を掘って生活するようすやメスの特徴等を図や写真を交えながら解説しています。

おさかな瓦版No.80は 以下のURLからダウンロードしてお読みいただけます。

<http://www.fra.affrc.go.jp/bulletin/letter/no80.pdf>

■トピックス

天鷹丸が竣工

(国立研究開発法人)水産研究・教育機構の水産大学の練習船天鷹丸(総トン数716トン)は、造船後32年を経過し老朽化していました。このたび新しい天鷹丸(総トン数995トン)が10月31日に竣工しました。新しい天鷹丸は、安全性の向上、居住環境の向上、排ガス規制等の国際規制に対応し、船舶運航及び漁業実習に対応する設備のほか、調査・研究設備及び研究室を備え、研究部門の調査船としての機能を併せ持つ最新の練習船となっています。



練習船 天鷹丸(てんようまる)

そのため、従来からの水中グライダー、ノルパックネット等に加え、新たな調査観測器等として、CTD、計量魚群探知機、サイドスキャンソナー、モックネスネット、トロール(表・中層ならびに低層用)漁網監視装置、超音波流速計、マルチナロービーム海底地形探査装置等を導入しています。

1. 主要寸法等	2. 速力	3. 定員	4. 機関等	5. 造船所
全長 64.67メートル 幅(型) 11.90メートル 深さ(型) 6.98メートル 総トン数(国内) 995トン 国際総トン数 1,354トン	最高速力 13.59ノット 航海速力 12.00ノット 航続距離 6,000海里	乗組員 28名 教員・調査員 8名 学生 50名 予備 1名 合計 87名	主機関 ディーゼル機関 (1,700キロワット) 1基 推進器 4翼可変ピッチプロペラ 1基	三菱重工業(株) 下関造船所

問い合わせ先

国立研究開発法人 水産研究・教育機構 経営企画部広報課

〒220-6115 神奈川県横浜市西区みなとみらい2-3-3 クイーンズタワー B棟15階

TEL:045-227-2600(代表) URL:<http://www.fra.affrc.go.jp/>

事務局便り

JFSTA NEWS Vol.49 の記事訂正について

ニュース49号の記事「魚見桜の蘊蓄⑩ 城下海岸にアカウミガメ」について、『写真のウミガメはアカウミガメではなく、アオウミガメの未成熟個体ではないか』との会員からの指摘がありました。事務局では、指摘を受けて文献(内田:1982)*等を参照して写真を確認し、背甲を構成する肋甲板の数と形状、頭部を形成する各種鱗板の数と位置等から、指摘のとおりアオウミガメであると判断するに至りました。このため、筆者の了解のもと、ニュース49号の記事のタイトルと文章中の名称「アカウミガメ」を「アオウミガメ」に訂正いたします。

* 内田 至(1982): 海ガメ学入門(I) 現生ウミガメ類の形態と分類、海洋と生物22(Vol.4-No.5)

事務局の不手際をお詫びするとともに、ご指摘いただいた堤清樹会員にお礼を申し上げます。

一般社団法人 全国水産技術者協会

〒107-0052 東京都港区赤坂一丁目9番13号 三会堂ビル9F TEL 03-6459-1911 FAX 03-6459-1912
E-mail zensuigikyo@jfsta.or.jp URL <http://www.jfsta.or.jp>